

笠井叡は1943年三重県で生まれた。裁判官だった厳格な父親、笠井寅雄の影響下で幼少時代を過ごすが、1954年9月26日の洞爺丸海難事故で父親を亡くす。キリスト教の洗礼は受けていないが、教会生活は長く、「イエスの復活」という歴史的事実は笠井にとって生涯のテーマといっていい。江口隆哉・宮操子のスタジオで学んだことでダンスの世界に入り、後に大野一雄に出会い、三年間、個人指導を受ける。1963年10月、朝日講堂で「儀儀」を踊ったことが遠因となって土方翼と出会い、1965年11月「バラ色ダンス—A LA MAISON DE M. CIVECAWA」(千日谷会場)に出演する。暗黒「舞踏」という用語は、笠井の発案を土方が採用したものである。1971年天使館設立、1979年から1985年までドイツに在住した。オイリュトミー、パントマイムも視野に入れ、狭い意味での「舞踏」に囚われない表現者である。

文章家としても高い評価を得ており、神秘性、精神性を重視する姿勢は、『天使論』、『聖霊舞踏』、『金鱗の鰐を取り置く術』、細江英公との共同による写真集『透明迷宮』ほか多数の著作として結実している。その範囲は、西洋神秘学から日本の大石凝真素美『真訓古事記』まで及び、その表現は、単なる日

常言語を超えて「ダンス」にまで昇華されて、熱烈なファンを持つ著述家でもある。「大宇宙の音楽が聴こえる」(『聖霊舞踏』、p.9)あるいは「聖霊とはエネルギーであって、これなしに人は一瞬たりとも生きることができない」(『聖霊舞踏』、p.26)と笠井が述べる時、例えばジョン・ディヴィース(Sir John Davies, 1569-1626)の詩に表れている一森羅万象を踊りとして捉えるヨーロッパ前近代の『ダンス宇宙観』と通じ、現代日本を超えた宇宙性と歴史性がそのコトバにも姿を現わす。

笠井は『カラダと生命—超時代ダンス論』の冒頭で次のように述べる、「歴史というものが常に生きた存在として変化し続けている限り、どんな時代も一つの転換期です。けれども、一人の人間はすべての時代を生き続けているのではなく、ある特定の時代を生きているわけですから、自分が生きている時代そのものが、どのような転換期であるかをリアルに感じ取るためには、歴史全体を俯瞰することができるような、何らかの想像力を駆使しなければなりません」。この言葉に表れているように、笠井は、踊りにおいても、現代性、社会性を強く意識する。そして、2013年度「日本国憲法を踊る」で芸術選奨文部科学大臣賞を受賞している。(小菅隼人記)

出演 | 笠井叡

朗読 | 笠井 禮示

音響・照明 | 曾我傑

テキスト | ヨハネ福音書 第1章 1節-14節

カナの結婚式 / ラザロの復活 / ポンティオ・ピラト / 受難～埋葬～復活

ヨハネ黙示録 第12章

音楽 | J・S・バッハ作曲 ヨハネ受難曲 合唱とコラールとアリア

お問合せ | 慶應義塾大学アート・センター

108-8345 東京都港区三田 2-15-45

Tel 03-5427-1621

Contact | Keio University Art Center

2-15-45, Mita, Minato-ku, Tokyo

email [ishimoto@art-c.keio.ac.jp](mailto:ishimoto@art-c.keio.ac.jp)



詳細は HP をご覧ください。

主催 | 慶應義塾大学教養研究センター日吉行事委員会 (HAPP)

慶應義塾大学アート・センター

コーディネーター | 小菅隼人

写真 | 大洞博靖

